

鳥羽離宮跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報

二〇〇三
一四

鳥羽離宮跡

2004年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

鳥羽離宮跡

2004年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平米から、数千平米におよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび京都高速道路（油小路線）建設に伴います鳥羽離宮跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

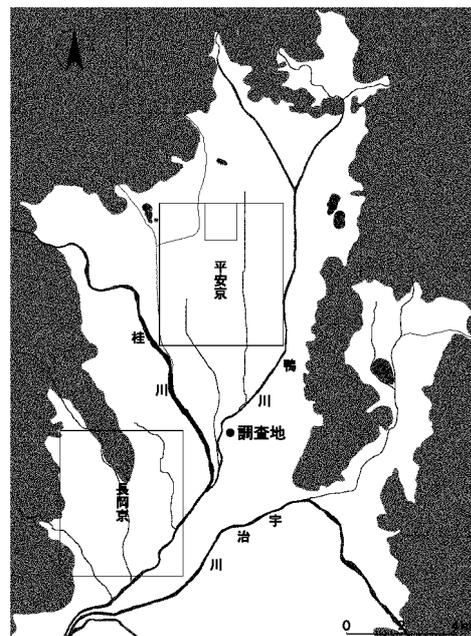
平成16年3月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 鳥羽離宮跡（149次調査）
- 2 調査所在地 京都市伏見区竹田西内畑町
- 3 委託者及び承諾者 三菱・東骨JV、瀧上・川田JV
- 4 調査期間 2004年1月6日～2004年1月23日
- 5 調査面積 250m²
- 6 調査担当職員 本 弥八郎
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「城南宮」「下鳥羽」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡測量基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 1・2区に通し番号を付し、遺構種類（SD・SX）を前につけた。
- 13 遺物番号 挿図の順に通し番号を付した。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子
- 15 基準点測量 宮原健吾
- 16 作成担当職員 本 弥八郎



（調査地点図）

目 次

1 . 調査経過	1
2 . 遺 構	2
(1) 1 区	2
(2) 2 区	4
3 . 遺 物	5
4 . ま と め	6

図 版 目 次

図版 1	遺 構	調査位置図 (1 : 10,000)
図版 2	遺 構	1 1 区第 1 面全景 (西から)
		2 1 区第 2 面全景 (西から)
図版 3	遺 構	1 2 区第 1 面全景 (西から)
		2 2 区第 2 面全景 (東から)

挿 図 目 次

図 1	調査位置図 (1 : 5,000)	1
図 2	調査前全景 (南から)	2
図 3	調査風景	2
図 4	1 区第 1 面平面図 (1 : 200)	3
図 5	1 区第 2 面平面図 (1 : 200)	3
図 6	1 区北壁断面図 (1 : 100)	3
図 7	2 区第 1 面平面図 (1 : 200)	4
図 8	2 区第 2 面平面図 (1 : 200)	4
図 9	2 区北壁断面図 (1 : 100)	4
図 10	土器実測図 (1 : 4)	5
図 11	軒丸瓦拓影・実測図 (1 : 4)	5

表 目 次

表 1	遺構概要表	2
表 2	遺物概要表	5

鳥羽離宮跡149次調査

1. 調査経過

調査地は京都市伏見区竹田西内畑町を南北に伸びる新油小路通の中央分離帯部分で、京都高速道路（油小路線）竹田3工区（その2）鋼桁工事に伴う調査である。この分離帯部分を対象とする発掘調査は、2002年10月に「鳥羽離宮跡145次・146次調査、下鳥羽遺跡」として当研究所が実施している¹⁾。その時の調査対象地は高架道路の橋脚位置であり、名神高速道路の南から丹波橋通間で13個所に調査区を設定し、多くの成果を得ている。今回も橋脚工事に関連するもので、対象地は鳥羽離宮145次調査 20トレンチの約1m南の位置である。

調査地は、平安時代後期の鳥羽離宮東殿跡に該当し、また近接する南側には縄文時代から飛鳥時代の鳥羽遺跡が推定されている。調査区の南約30mでは、新油小路建設に先立つ発掘調査（71次調査）で、弥生時代の溝に多量の土器が投棄された状況を確認している²⁾。また、南西側約100mでの発掘調査（64次調査）では中世の建物群とその北側に広がる低湿地を検出している³⁾。

調査対象地は南・北2箇所あり、北側の調査区を1区、南側を2区とした。1区は約175m²、2区は約75m²である。

機械掘削は1月6日から1月8日まで実施した。1区・2区とも室町時代の遺構面とその下層

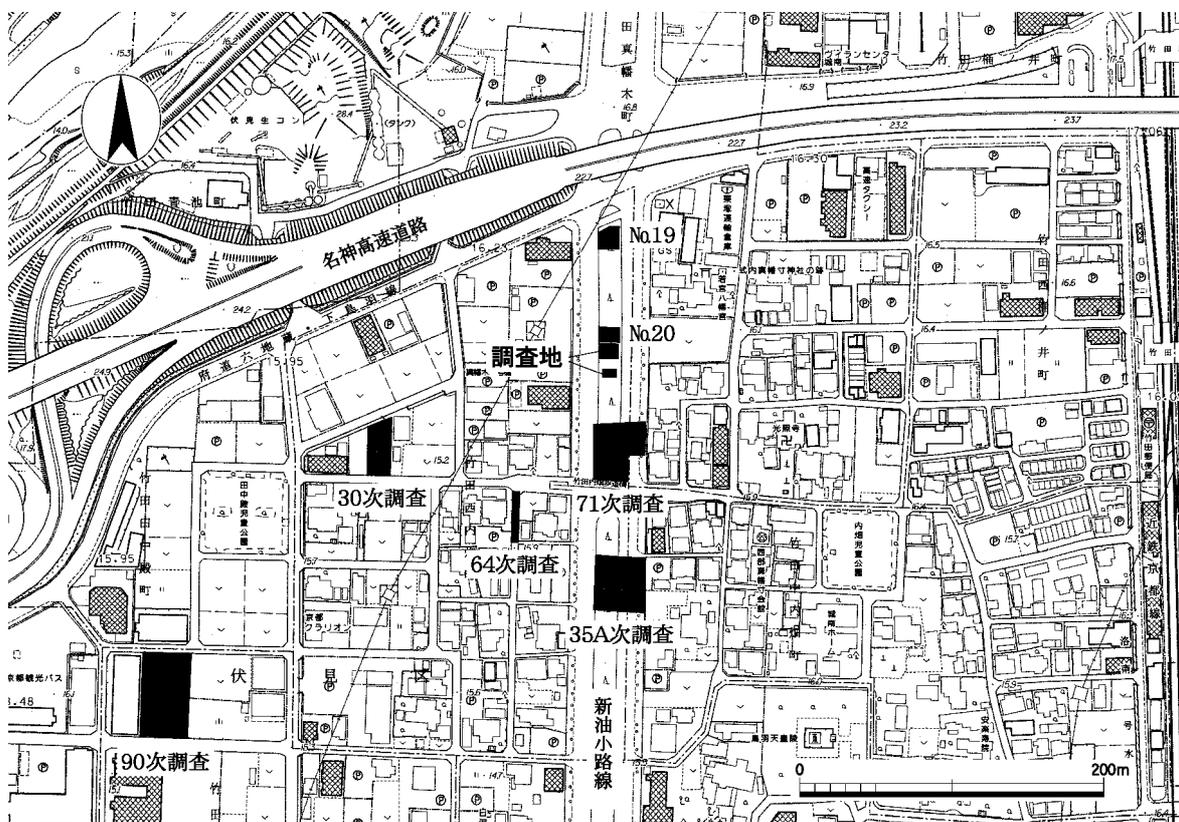


図1 調査位置図（1：5,000）



図2 調査前全景（南から）



図3 調査風景（南から）

の鎌倉時代の遺構面で調査を行い、溝6条、湿地状遺構2基を検出した。その後、両調査区とも断割調査を実施し、下層の堆積層の確認と遺物採取を行ったが途中から湧水が激しくなり、それより下層の調査は中断を余儀なくされた。その後、写真撮影・実測作業などを行い、1月21日から重機による埋め戻しを開始し、同23日に調査をすべて終了した。

2. 遺 構

層序は、土色は異なるが1区・2区とも基本的にはほぼ同じである。1区では現代盛土層下の深さ約1.3 の間に10層が堆積し、2区では深さ1.5 の間に12層が堆積する。遺構の検出された第1面と第2面で調査を行った。なお1区は調査区内に東西・南北にサブトレンチを設定して掘り下げ、第2面を検出した。第2面以下の堆積層については、断割調査を行い各層から遺物採取を行った。

(1) 1区(図4～6)

地表下約1.0 ままで新油小路建設時の現代盛土で、以下に近・現代の耕土・床土層があり、耕土層下より溝SD1が検出される。室町時代の遺構は、耕土層下3層から4層目の標高14.50 前後で検出した。南北溝SD2・3、SX6などがある。鎌倉時代の遺構は、耕土層下6層(5YR4/2 灰オリーブ色砂泥)上面の標高約14.10 で調査区西側に南北溝SD8と、その東側で浅く落ち込む遺構SX7を検出した。同層以下に8・9・10層と堆積するが遺構は検出されていない。10層に

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	
	1 区	2 区
鎌倉時代	SD 8、SX 7	SX 9
室町時代	SD 2・3、SX 6	SD 4・5
江戸時代	SD 1	

は植物遺体が多く含まれる。

SD1は調査区西側で検出した南北溝で、幅40～60cm、深さ35cmで、溝内には太い竹とその周囲に小石が詰められており、耕作に関連する湿気抜き溝である。溝内からは土師器片・

染付が出土している。

SD 2 は幅20～30cm、深さ約20cmで、南北約8.8 を検出した。方位は北でわずかに東に振れる。埋土は灰色砂泥で、室町時代の土師器が出土している。

SD 3 は幅20～40cm、深さ15 cmで、検出長・方位・埋土などはSD 2 と同じである。

なお上記3条の溝は、145次調査でも検出されている。

SX 6 は調査区北東隅で検出した。深さ10cm前後の不整形な落込で、埋土の暗オリーブ灰色泥砂からは室町時代の土師器が出土している。

第2面のSD 8 は幅40～50cm、深さ25cmで、南北1.8 を検出した。埋土は灰色砂泥で、土師器・瓦器が出土した。

SD 8 の東2.7 では南北に延びるSX 7 の西肩を検出した。深さ15cm前後の湿地状の堆積で、東は調査区外に延びる。埋土は灰色砂泥で、鎌倉時代の土師器が出土した。

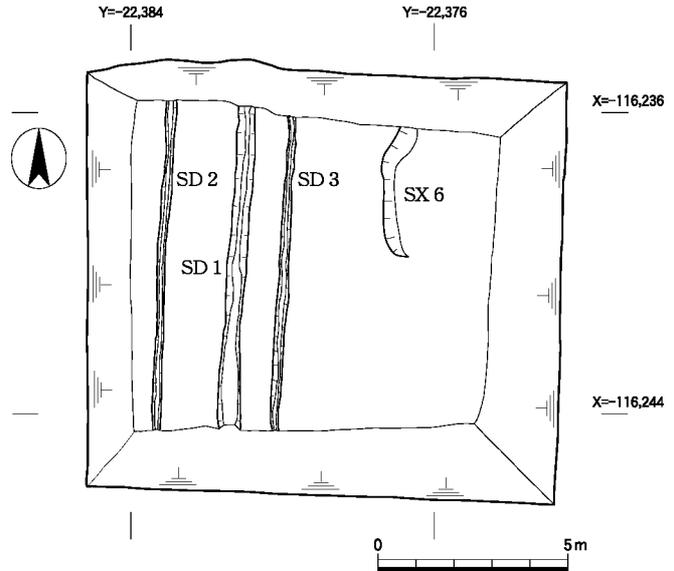


図4 1区第1面平面図(1:200)

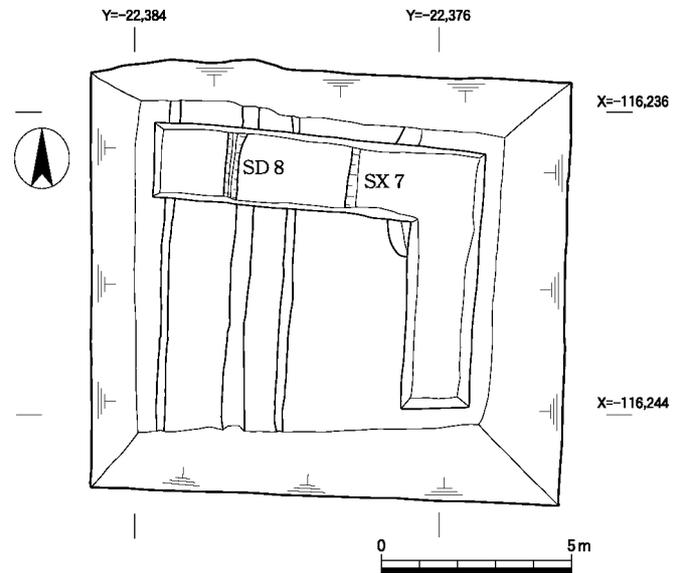
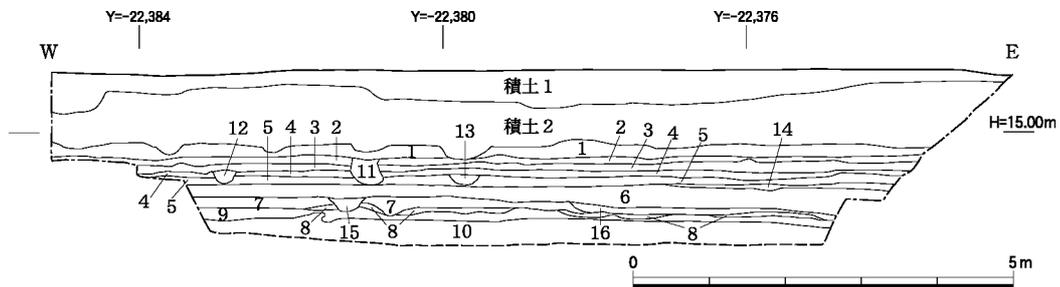


図5 1区第2面平面図(1:200)



- | | |
|------------------------------------|---------------------------|
| 1 2.5Y3/1 黒褐色砂泥(耕土) | 9 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色シルト |
| 2 10Y4/1 灰色泥砂、砂多い | 10 2.5Y3/1 黒褐色粘土、植物遺体含む |
| 3 10Y5/1 灰色泥砂、砂質 | 11 5Y6/1 灰色砂泥(SD 1) |
| 4 10Y4/1 灰色砂泥 | 12 2.5Y7/1 灰白色砂泥(SD 2) |
| 5 7.5Y4/1 灰色砂泥、鉄分多く上部が茶褐色 | 13 2.5Y7/1 灰白色砂泥(SD 3) |
| 6 10Y4/1 灰色砂泥(湿地堆積) | 14 5GY4/1 暗オリーブ灰色泥砂(SX 6) |
| 7 5Y4/2 灰オリーブ色砂泥 | 15 10Y5/1 灰色砂泥(SD 8) |
| 8 2.5Y3/1 黒褐色粘土+2.5Y4/1 暗オリーブ灰色シルト | 16 5Y5/1 灰色砂泥(SX 7) |

図6 1区北壁断面図(1:100)

(2) 2区 (図7~9)

地表下約1.0 mまでが現代盛土層で、その下層が近・現代の耕土層となる。第1面は耕土層下5層(オリーブ黒色砂泥)上面の標高14.30で、SD4・5を検出した。第2面は耕土層下7層(灰色泥砂)上面の標高約14.00で、検出した遺構はSX9である。SX9以下に9~13層が堆積するが遺構・遺物は検出されていない。11層には腐植土が含まれる。

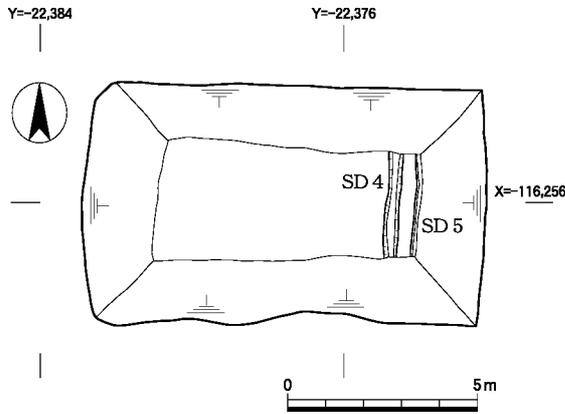


図7 2区第1面平面図(1:200)

SD4・5は調査区東辺で検出した南北溝である。SD4は幅約40cm、深さ15cm、埋土は灰色砂泥である。SD5は、溝東肩が東壁下に延びるため幅は不明、深さ約10cm、埋土は灰オリーブ色砂泥である。両溝からの出土遺物は弥生土器片であるが、層位的に1区第1面のSD2・3と同時期とみられる。

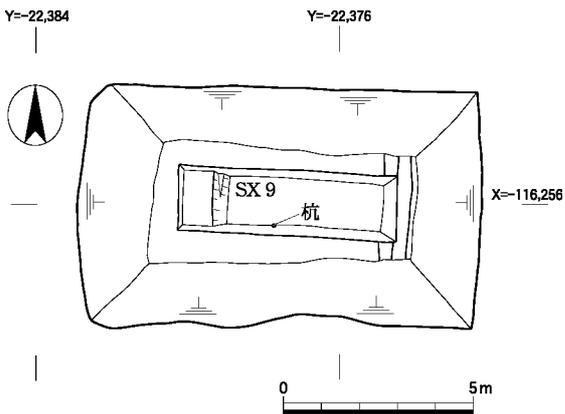


図8 2区第2面平面図(1:200)

SX9は1区SX7と同じく湿地状遺構で、調査区西端に南北方向の西肩口を長さ1.4m検出した。東側は調査区外に延びる。深さは20cm前後で灰色泥砂が堆積する。出土遺物には土師器・瓦器がある。この湿地は1区SX7の南延長部分と考えられる。

なお、7層上面で径が約5cm、長さ約50cmの先端を尖らせた自然木の丸杭を検出した。検出位置はSX9の西肩口から東約2mである。

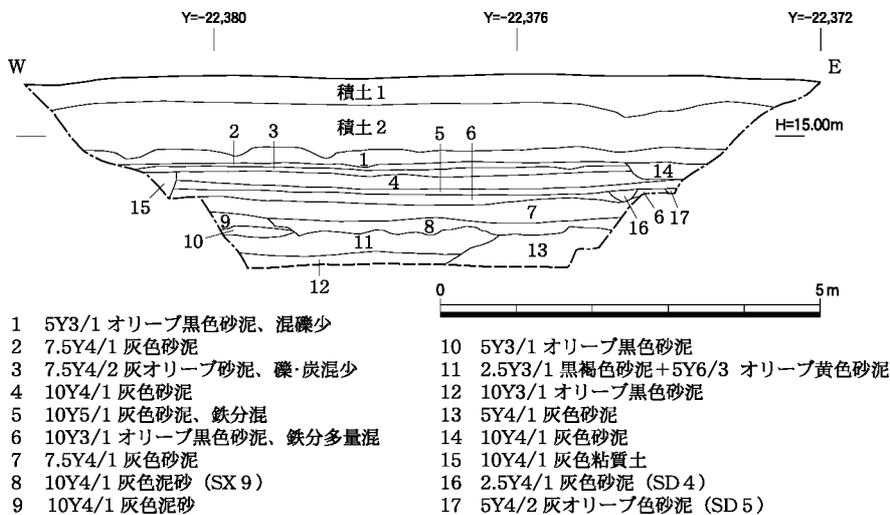


図9 2区北壁断面図(1:100)

3. 遺物

遺物はコンテナに3箱出土した。内容は、ほとんどが土器類で、他に石製品や瓦類がわずかに出土している。いずれも小破片で、量的にも少ない。時代的には弥生時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代である。

弥生時代の土器類は、全形を知り得るものはなく、甕の口縁部や壺の底部などがある。弥生土器は、いずれも各遺物包含層、遺構に混入したもので、特に1区の6層の灰色泥砂からの出土が多い。

平安時代の遺物には、1区6層出土の土師器杯(3)、瓦器椀(5)がある。

平安時代後期から鎌倉時代にかけての遺物には、1区SX7出土の土師器皿(1)、1区SD8出土の土師器皿(2)、1区6層出土の瓦器椀(6)がある。

室町時代の遺物には、1区SD3出土の土師器皿(4)がある。

平安時代の軒瓦(7)は、播磨産の複弁六弁蓮華文軒丸瓦であり、鳥羽離宮の金剛心院跡でよく出土するものである。2区の現代盛土層から出土。

江戸時代以降の遺物は、耕作土層、床土層、湿気抜き溝(SD1)などから陶器・磁器・染付が出土している。他に、2区7層から滑石製品の小破片が出土している。

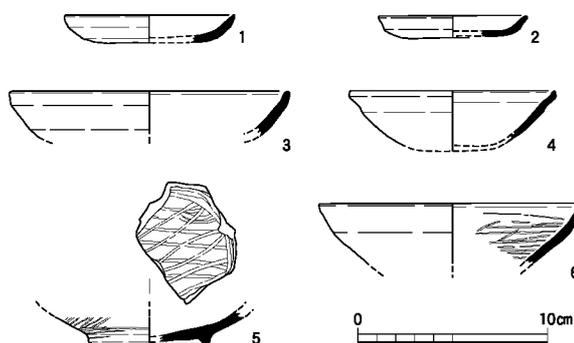


図10 土器実測図(1:4)

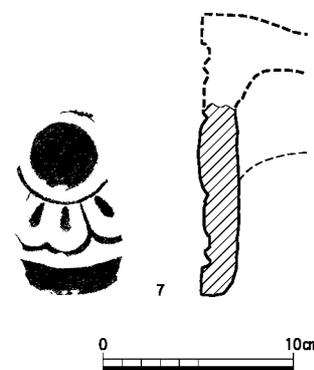


図11 軒丸瓦拓影・実測図(1:4)

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	弥生土器				
平安時代	土師器、瓦器、須恵器、瓦		土師器1点、瓦器1点、軒丸瓦1点		
平安時代後期 ～鎌倉時代	土師器、瓦器、瓦、石製品		土師器2点、瓦器1点		
室町時代	土師器		土師器1点		
江戸時代	陶器、磁器、染付				
合計		4箱	7点(1箱)	1箱	2箱

コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

4.まとめ

昭和51年度から、新油小路通建設と京都高速道路2号線建設工事に伴う発掘調査により多くの成果が集積され、報告されてきた。この道路関連の調査は、鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡・下鳥羽遺跡の3遺跡を南北1,450に渡り縦断するかたちで行われたことになり、遺跡の繋がりや範囲がさらに明確になった。高速道路2号線の調査に関して言えば、下鳥羽遺跡の弥生時代については新油小路通より西にその中心があることがあらためて確認され、標高12.20で平安時代前期にまで遡る生活の跡が確認された。その北側の146次調査では、鳥羽離宮跡の南限で旧鴨川の河床跡を標高13.30で検出し、近世に現在の鴨川位置に付け替えられ、その跡地が水田化したことが認められた。さらに新城南宮道付近では標高14.00付近で鳥羽離宮の建物地業跡・池跡を検出し、その下層には離宮期以前に存在した湿地あるいは沼地を確認している。また、145次調査・今回の調査区の北側では、標高14.40で平安時代の遺物包含層を検出し、その下層に湿地に堆積する腐植土層を検出している。このように遺跡の立地・自然環境を長距離にわたり把握する事ができた。今回の調査成果は、145次調査とほぼ同じであり、鳥羽離宮東殿に関連する遺構は検出できなかったが、旧鴨川と旧桂川に挟まれた湿地あるいは自然堤防上に築かれた鳥羽離宮の全体象解明への一資料となり得た。

今回の調査区周辺の調査で明らかになった陸部と低湿地の状況を挙げてみると、27・73次調査地はいずれも北東から南西に延びる湿地内であり、71・64・70次調査では東殿範囲と考えられる陸部と湿地の境界を確認している。また、西側の田中殿と湿地の境界は30・67次調査⁴⁾で検出されており、特に67次調査では明瞭な洲浜を伴っている。同調査報告でも述べられているが、当地域は複雑に湿地・流路が入り組んでおり、鳥羽離宮造営時にはそれらを庭園として取り込んだと考えられる。前述の71次調査では標高14.30で北東から南西に向けて流れる弥生時代の溝を検出しているが、この溝は集落の境界あるいは排水路的なものと考えられる。今回の調査地は標高からみて平安時代の陸部とはなり得ず、この湿潤な状況は弥生時代に遡る可能性があると言えよう。

註

- 1) 尾藤徳行・吉村正親「鳥羽離宮跡145次調査(第3工区)」『鳥羽離宮跡・下鳥羽遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-8 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2002年
吉村正親「鳥羽離宮跡146次調査(第4工区)」同上
南出俊彦「下鳥羽遺跡(第5工区)」同上
- 2) 木下保明・長宗繁一・本 弥八郎「第71次調査」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983年
- 3) 「第64次発掘調査」『鳥羽離宮跡 区画整理道路予定地内発掘調査概要』昭和54年度 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1981年
- 4) 前田義明「第67次発掘調査」『鳥羽離宮跡調査概要』昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査センター 1981年

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	とばりきゅうあと							
書名	鳥羽離宮跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2003-14							
編集者名	本 弥八郎							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とばりきゅうあと 鳥羽離宮跡 (149次調査)	きょうとしふしみく 京都市伏見区 たけだにしうちほたちょう 竹田西内畑町	26100	1166	34度 57分 07秒	135度 45分 18秒	2004年1月 6日～2004 年1月23日	250m ²	高速道路 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
鳥羽離宮跡 (149次調査)	離宮跡	鎌倉時代 ～室町時代	溝・湿地状堆積	土師器・瓦器・軒丸瓦				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-14

鳥羽離宮跡

発行日 2004年3月31日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961